現在もなおその面影をよく遺していること、綱吉将軍の時代に越後騒動と呼ばれる御家騒動が起つたこと、また享保の質地騒動、明治十六年の高田事件、昭和初年の和田村小作争議、あるいはこの地帯が有数の豪雪地域で、雁木と呼ばれる避雪用のアーケード（？）が町並を特徴づけており、スキー発祥の地としても有名であること等々。このたび発刊された「高田市史」全二巻は、これらの事物に関するより詳しい知識を与えてくれる。

高田の歴史は慶長年中に松平光長がこの地に城を築き町を創設して以来のことであるから、高田市史もそこから筆が起されている。第一巻は開府から明治四十四年の市制施行前まで、第二巻は市制施行から昭和三十年の近村合併までを取扱い、章は時代別に、節は項目別をも加味して構成されている。表現はやさしく、写真・地図・グラフも比較的多く挿入され、またたとえば、はじめてポンプを買つた人、死体解剖の最初といつた細々とした事柄や名士紹介などが適宜に記載されていることに、その地に住む一般の人々に愛され重宝されるための好ましい配慮がうかがわれるのである。さらに、各巻のはじめに年表、おわりに索引のかなり詳しいものが付けられ、各頁に頭註があつて、郷土誌の機能の一つであるその地の事物に関する辞書としての役割にもかなつたものとなつている。

しかしながら、それはまた専門的研究にとつても有用であつてほしいことはいうまでもなく、その点でこの書は原史料もできるだけ載せようとしており、載せない場合は叙述の拠つている史料名を記している。原史料の掲載に関しては、すでに学界に紹介されているものや重要なものより、比較的知られていない史料を掲げる努力を払つているように見受けられる。また概説された部分にあつては、高田城址の測量、士族授産、米騒動、和田村小作争議等の項にみられるように、郷土史研究雑誌「頸城文化」などによつて得られた成果をとり入れ、編集委員の蘊蓄を傾けている。

高田は典型的な城下町として発展した関係から、いきおいその歴史の叙述は藩史あるいは藩制史に詳しいという傾向を強く持つている。そのためか、一般町民の生活の息吹きを描き出すに欠けた感があるが、それは高田市史に限つたことではなかろう。むしろ、それによつて本書は高田藩政あるいは藩領の研究にとつても必要なものとなつている。（第一巻A5版八五六頁　第二巻七六〇頁　昭和三三年五月　高田市役所発行）（高沢裕一）

大和高田市史編集委員会編
大和高田市史

近年奈良県下における市町村史の編纂は誠に目ざましいものがあり、すでに郡山・今井・天理など十数ケ市町村に及んでいるが、更に昨年大和高田市史が上梓された。高田は大和盆地の西南部に位置し、その歴史的淵源の深いことは云う迄もないが、現在また紡績業を中心に県下屈指の商工都市として繁栄している。市史は「高田郷土史話」等の著者堀江彦三郎氏編集の下に、高田に由縁の深い同好の士が寄集い、郷土の歴史を回顧し、今後の発展の資助とされんとしたものである。叙述は平明、かつ郷土に対する愛着と、それでいて学的水準を保たれているのは、本書へ傾注した関係者の努力の並々ならぬことを示していて快いが、更に豊富な写真に、委員野沢寛氏の滋味溢るる挿絵多数を加えたことは、一層

本書を親しみ易いものとしている。内容は序説、歴史、人文地理、民俗、旧跡伝説、社寺古文化財、文芸、人物、現代、教育、金石文、地名の各篇よりなり、歴史的諸事象全般にわたつてむらなく記述を図られている。

先史時代に始まる高田の歴史は、築山古墳群に大和豪族の勢威を偲び、万城氏・当麻氏に古代豪族の盛衰を語り、その下に哀歓の人生を送つた祖先を考えさせるが、やがて中世には高田・万歳の諸氏が、乱離の大和に興亡の夢を残していく。この動向をかなり克明に追求されると共に、この基盤たる荘園制について特に一章を設け、二千余町に上る特異な大荘園平田荘の解明を行われたのは、筆者の苦心の窺える所であり、興味深いものがあつた。土豪高田氏の滅亡に中世は終り、近世高田が新しく商工業都市として発展する。寺内町の存在、町場的発展の情況は、それなりに現在学界の問題点でもあり、注目しうるが、この繁栄を支え、近代高田を準備したものは、綿業であつた。それ故に棉作と綿の流通過程、紡績業について力を傾けておられるのも私などには有難いし、この産業的実力を背景に、梅田雲浜が長州交易を行い、薩藩国産会所が設置された事実には、維新史の一断面をよみとりうるであろう。かくして現代の高田の姿が展開するが、諸団体から戦歿者名簿まで、かなり詳細な記述が付されていて地元の人々にとつて親しみ深い内容となつている。かようにこの大冊はすぐれた内容をもつているが、若干感想を付加すると、叙述に精粗があり、一つの時代としては有機的構成に難がある点も間々見うけるが、各篇の構成を史的流れの中で統一して頂いた方がよかつたのではないかと思う。なおこの書物に史料篇を欠いているのは残念で、特に村島家文書などは、何らかの形で公表して頂けるならば学界の為にも歓迎すべきことであろう。とはいえこの大冊を完成された関係者の方々の努力に深い敬意を表したい。（A5版七八四頁　昭和三三年四月　大和高田市役所発行）

（脇田　修）

編集後記

一読、ごらんのごとく、力作大篇が顔をならべることとなりました。一号からの増頁が、執筆者の意を強くしたわけでもあるまいが、篇数では、これまでとかわらない結果になつたのは、すべてこれ長篇のせいであります。ついに収載しきれず、次号にみおくらねばならぬ珠篇をめぐつて、論議に思わず大寒の一日をすごしたことでした。

増頁は、あくまで収載篇数をふやす方針からふみきつたもので、今後は各号約六篇を目標にしてゆきたいと思つております。なるべく簡潔に、「一篇四〇〇字五〇枚ていど」の原則をまもつて下さるようお願いいたします。

おわりに、未納の誌代をお忘れなく。

（西谷真治）

一九五九年二月二五日印刷
一九五九年三月一日発行
史林（第四二巻　第二号）　定価一八〇円
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行所　史学研究会
理事長　宮崎市定
編集主任　赤松俊秀
振替京都五一五五番
京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
印刷所　中村印刷株式会社